

カプリチオ (狂想曲)

指の回りを楽しみながら、p指の感覚を養おう！

Allegro

作曲 カルカッシ

The musical score is written on a single treble clef staff in 4/4 time, with a key signature of one flat (B-flat). It consists of 22 measures. The piece begins with a forte (*f*) dynamic and an *Allegro* tempo. The notation includes various rhythmic patterns, primarily eighth and sixteenth notes, with frequent fingerings (0-4) and slurs. There are several first endings (C.1) indicated by dotted lines. Dynamics change throughout the piece, including mezzo-forte (*mf*), piano (*p*), and a decrescendo (*dim.*) leading to a *rall.* (rallentando) at the end. Red annotations with arrows point to specific notes, accompanied by the instruction "*1指の根本で押さえる" (press with the base of the 1st finger).

演奏アドバイス

●カプリチオ（カルカッシ）



マテオ・カルカッシ（1792～1853）はカルリ、ジュリアーニと並ぶ、イタリアを代表するギタリストです。彼の名は教則本と練習曲集によって広くギター愛好者に知られていますが、演奏でもかなり活躍しており、国外ではドイツを経て当時音楽の中心地だったパリへと演奏活動をし、パリではもっとも著名だったカルリとともに名声を博しました。

カプリチオとは奇想曲とも言われ、気まぐれ、移り気を表す言葉であり、自由な楽式で書かれた作品です。

この曲のアルペジオ部分の右手の運指は特に指定しておらず、どういう運指を使っても構いませんが、私は `pimiaimi` の繰り返しで弾いています。

まず最初に、この運指が無意識に体から発するように練習しましょう。その為に、「1～2小節だけゆっくり繰り返す練習→速く弾く練習」を行います。この時、気をつけるのが「音が立っているか」ということです。一つ一つの音の立ち上がりが速いか否かよく聴いて練習しましょう。
*音の立ち上がりとは～「弾弦した瞬間から音として一定の音量で聴こえて来るまでの時間」であり、これが速いほどクリアな音色であり遠達性が高い、とされています。

・ 1～4小節

この作品は低音が曲全体をリードしてゆく曲です。

低音がレレレ レミファレ、ラララ ラシドラと動いていることを感じて演奏しましょう。

・ 5～8小節

低音がレ レファミレ、ド ドレミド、ファ、ミ、レ、レファミレと動き、Dm → C7 → F → Dm と和音も変化してゆきます。こういうところがメロディーと和音を弾ける楽器の面白さですね。この変化をしっかり捉えながら演奏すると楽しいですね。

・ 9～12小節

ここで大切なことは10小節で「左1指の根本で押さえる」ことです。

通常は弦を押さえる時、「指の先で押さえましょう！」と言いますが、ここは次のセーハの体勢に入る準備も兼ねて「指の根元」で押さえることが大切です。

クラシック・ギターでは時々出てくる押さえ方です。

・ 13～16小節

ほぼ9～12小節の繰り返しです。繰り返しの場合、前のフレーズとは違う表現で演奏することが大切です。例えば、「遠くから聴こえてくるように」とか、「過去から聴こえてくるように」など想像を働かせて演奏してみましょう。

・ 17小節～最後

低音のメロディーをよく聴きながら、エンディングを演奏してゆきましょう。

最後のラレントは「曲が終わりますよ」というメッセージを発しながらゆっくり終わってゆくようにしましょう。